
セブンキラー

奇哲正人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

セブンキラー

【Nコード】

N3241U

【作者名】

奇哲正人

【あらすじ】

資金に困っていた大学生「佐藤晴彦」は、大金が得られるという怪しい広告に興味をもち応募してしまう。

参加者は7名。この中には殺人中毒者が混ざっている。

6名は殺人中毒者を当てよ。

殺人中毒者は、全てを殺せ。

広告

「やっべー……学費つかっちまった……」

パチンコ店から、重い足取りで出てくる1人の青年。

現在大学2年生、佐藤晴彦^{さとう はるひこ}。19歳。

月末に支払う為に、親から送られてきた学費をパチンコで使ってしまった。

最初はほんの1万円程度を借りるつもりだった。

だが、もう1万、もう2万と少しずつ学費に手を出し、気づけば学費のほとんどを使いきっていた。

現在手元に残るのは、僅か3万円ちょっとだった。

「こりや食費にしかならねーな……家賃すら払えねー」

がしがしと頭をかきむしり、これからどうしたらいいかと悩む。

通行人が冷たい視線を送ってくるがそんなこと知ったことでは無い。こっちは死活問題なのだ。

家賃8万円。

学費40万円。

あわせておよそ50万円。

そんな大金、ちょっとバイトしただけで稼げるものではない。

やはりギャンブルか、そう頭に過ぎる。

だが、その結果が今である。

「ハア……ちょっとくらい危険でもいいから、金の良い仕事ってね

「かな」

自分でも甘い考えだと思うが、それでも限り現状を打破できない。

「――あるじゃねーか！」

自宅のパソコンから、あらゆる広告を見ていた。

ありきたりな時給800円の募集。

怪しいお店での労働、時給2000円。

薬の実験、三日間で5万円等……。

その中でもずば抜けて高収入な広告があった。

人材募集

応募人数次第でテーマを決定し、

そのテーマにそって七日間の生活を行っていただきます。

期間中の住居提供有り。

期間中の食事提供有り。

報酬

前金500,000円。後金1,500,000円。

条件

なし。どなたでも。

「500,000円……いち、じゅう、ひゃく、せん、まん――」

「50万円……!?!前払いで50万!」

コレだ!これっきゃない!

晴彦のテンションは一気にあがる。

危うく勢いで申し込みそうになるが、そこは踏みとどまる。
怪しい仕事である事は違いない為、体験者レビューを見てから決めるように思った。

合計報酬20万円で、七日間筋トレ生活でした。過酷だった。

合計報酬400万円。一週間お菓子で生活。天才になれるかの実験だった。もう甘いモノは食べたくない。

前金10万、後金30万。合計40万円。一日一食、かつ特殊訓練。霊が見えるようになった。

他24件のレビューあり。もっと見る。

「へえ……、思ったよりも有名所なのか？ 案外レビューあるもんだな」

これなら信頼に足ると思い、桁がおかしい報酬といえどさほど警戒をせず。

晴彦はこの広告先に、申し込んだ。

てづから機関（前書き）

この物語はフィクションであり、実在する人物・組織とは関係ありません。

てづから機関

「ここで合ってる……よな……？」

晴彦は不安げにビルを眺めた。

ビルには灰田ビルと書かれてある。

建物は古く、ところどころヒビが入ってるようだ。

シミや汚れも多く、廃ビル一步手前といったところ。

あたりに人通りはなく、不気味さをひしひしと感じる建物だった。

「俺やめようかな……」

晴彦は建物の前で、立ち尽くす。

すると、ビルの中からスーツを着た中年の男が出てきた。

その男は晴彦に気づいて近寄ってくる。

「おや、君はもしかして。広告をみて応募してくれた子かな？」

「あ、えーと、はい。そうです」

一瞬どう答えようかと迷ったが、

今更参加をやめるだけの余裕は、今の晴彦にはなかった。

「そうか、よかったよ。もしかして迷ってるんじゃないかと心配になってね。

それでこうして見に来たわけなんだけど……立ち話もなんだし、

中へいこうか」

中年の男は優しい口調でビルへと案内をする。

建物から不安になっていた晴彦だったが、

中年の男の優しそうな雰囲気に一安心し、ビルへと足を踏み入れた。

晴彦は、階段を2つほどあがったところにある事務所案内される。

その扉には、てづから機関と書かれていた。

中はキレイに清掃されており、外から見るとほどこいものではなかった。

「そこに座って待っていてくれるかな」

中年の男はソファを指差し、晴彦はそこに座る。

事務所内に人の気配がほとんどなく、どうやらこの中年の男しかないようだ。

しばらくすると、先ほどの中年の男が飲み物を持ってきた。

「たいしたおもてなしもできずに悪いね」

「いえ、お構いなく。ありがとうございます」

「早速だけど、仕事の話をしようか」

中年の男はそばにおいてあった鞆をあけ、中から書類を取り出す。

「おっと、そういえば確認をしていなかったね。これはうつかりしてたよ。君の名前はなんていうか教えてくれるかな？」

「俺の名前は、春彦です。佐藤春彦」

「うん、本人だね。それじゃこれが契約内容だけど、確認してくれるかな」

中年の男から、1枚の書類が手渡される。

人材募集

応募人数次第でテーマを決定。

そのテーマにそって指定地域にて、七日間の生活を行う。

期間中の住居提供有り。

期間中の食事提供有り。

期間中のトラブルや損害など、全面的に保障します。

ただし、期間中のテスター同士のトラブルにつきましては、弊社は責任を負いません。

報酬

前金500,000円。後金1,500,000円。

条件

なし。どなたでも。

と書かれた書類。

多少の変更点や追加点はあるものの、大きな代わりは無い印象を受けた。

「すみません、この期間中のトラブルや損害で保障って、例えばどんな事ですか？」

「今までの事例だと……例えば筋トレをたくさんする仕事があったんだけど、その場合身体を壊す人が出てきてしまってたね。その通院費と賠償金をこちらが負担した事があったんだ」

「なるほど」

そういえばそんなレビューがあったつけ。

筋トレを一週間ずっとやってた、もうやりたくないとか。

保障もテーマ次第という事かと納得する。

「確認してくれたかな？そしたら、今度はこっちだね」

今度は契約書を差し出してきた。

バイトをする時と同じような、別段違和感もない普通の契約書。

さっと読んで、春彦は契約書に自分の名前を記した。

「これでいいですか？」

「確認させてもらうよ——うん、問題なしだ。後は日にちが迫ったらこちらから連絡をいれるよ」

「この七日間というのは、いつ頃になるんですか？」

春彦にはあまり時間がない。今日は10日。

今月が終わるまで、あと20日といったところ。

「あれ、言わなかったかな。13日～21日までの七日間だよ。ま
ずかったかな？」

「いえ、大丈夫です」

七日くらい、学校を休んだところでそれほど出席にも響かない。
はず。たぶん。

学費の納期は、今月末の30日。

これなら、学費を納めるのは間に合いそうだと一安心した。

「それじゃ、お願いします」

「こちらこそ、ありがとう。今月うちから募集者が出なかったクビ
だったんだ……本当ありがとう。お菓子食べるかい？」

「いえ、帰ります」

「そういわずに。何かお礼がしたいんだ。せんべいなんてどうだい
？」

「いえ、帰ります」

「じゃあ、ケーキなんてどうだい？」

「俺はご好意を無下にするような酷い人間ではありません、頂きま
す」

男二人。

ケーキの素晴らしさについて熱く語り、そして食べた。
ケーキの素晴らしさに乾杯。

二日後。

てづから機関からの連絡が届いた。

てづから機関2（前書き）

この物語はフィクションであり、
実在する人物・組織とは関係あり
ません。

てづから機関2

4月13日（日曜日）。00..55。

某場所に存在する、てづから機関の本社に晴彦はいた。

手には3日分程度の着替えが入った片手で持てる程度のバッグ。

「君で最後だ。さっさと乗ってもらおうか。コレが君の座席番号だ」
スーツを着た社員らしき人物が、マイクロバスを指差す。
手渡されたのは、プラスチックで出来た小さな紙で、E-3と書かれていた。

マイクロバスは、おそらく16人程度は乗れるであろう車。

見た目もキレイであり、お金を渋っている様子はない。

しっかりした機関なのだろう。

最初のビルがおんぼろだっただけに多少不安ではあった。

晴彦はバスに乗り込むと運転主からアイマスクを手渡される。

「指定地域は誰かからの妨害があつては困る為、完全秘匿とさせていただきます。」

道を覚えられると困るのでコレをご使用ください」

「あ、はい。わかりました」

「更にカーテンも閉めますので多少暗くなると思います。
時間も遅いですので、どうぞご就寝なさってください」

「わかりました」

短い会話を終わると、自分の座席に向かう。

途中にはアイマスクをして寝ているらしき人間がいた。

皆自分と同じ応募者なのかと疑問に思う。

アイマスクをしているせいか、どこか人間らしさを感じない。

まるで、マネキンのような、人形のような印象を受けた。

晴彦は自分の座席に着きしばらくすると、放送が流れる。

「これより、目的地へ向かいます。アイマスクをまだご使用されていない方は、

アイマスクのご使用をお願いします」

放送が終わると、バスにエンジンがかかり動き出す。

晴彦はアイマスクを着け、座席にもたれかかる。

アイマスクをしているせいか、揺れが大きく感じる。

眠ろうとすると、徐々に不安に襲われた。

普通ではないような高額な報酬。

本当にこの広告は大丈夫だったのか。

今更ながら、自分の判断が心配になる。

様々な事を考えながらも、気がつけば晴彦は眠っていた。

実験内容（前書き）

この物語はフィクションであり、実在する人物・組織とは関係ありません。

実験内容

「起きてください」

肩を揺すられ、聞き覚えのない声で起こされる。
目を開けるが何も見えない。

ああ、そういえばアイマスクをしていたんだっけ――。

ふと思い出し、アイマスクをとると昨夜の運転主の顔があった。

「おはようございます」

「おはようございます。皆さんバスを降りてこれから詳しい説明を
聞くとこです」

「あ、そうなんです。わかりました」
晴彦は持ち込んだバッグを手に持ち、バスを降りる。

あたりを見渡すと、プレバブの住居や、コンビニ、自販機などが見
える。

機関の敷地内らしく、標識などは見当たらない。

「お？こっちだぞー！」

声のするほうには、10人程度の人ばかりがあった。

若い私服の男が手を振っている。

この人も自分と同じテスターだろうか、そう思いつつ近づいた。

「これで全員そろったんだろ。いい加減説明してくれよ」

若い私服の男は、グレーのスーツを着た男に語りかける。

どうやら、この機関の人間らしい。

グレーのスーツの人間は、周りに4人の黒服のスーツの人間を立たせていた。

周りを見渡すと、6人の私服の来た人は皆、スーツを着た人達を見ている。

「ではご説明いたします。まず皆さんに朗報です。今回の報酬ですが、引き上げが決定しました。

前払い報酬は既に受け取っているはずですが、後払いが950万円になりました。合計で1000万円ですね」

「1000万……!?!」

晴彦は驚きの声をあげる。他の人も皆、驚いた反応。

なかにはおろおろしている女性もいた。

「本日のテーマがやや危険なモノになったのと、秘匿義務の発生により今回の報酬とさせて頂きます」

「それで？肝心のテーマはなんなんだ？」

晴彦を呼んだ若い男は、若干イラついている様子だった。

「本日のテーマは、探偵ごっこです」

機関の人間の言葉に、一切の優しさは見られなかった。

探偵ごっこなどという子供の遊びのような言い方に、悪意しか感じられない。

その様子は参加者一同が感じたようで、誰も言葉を発しない。

「皆様お集まりいただいた方は、全員で7名。この中に1人だけ殺人鬼がいます。皆様にはその人物を当てていただきたく思います」
殺人鬼というワードに、参加者数人がざわめいた。

「もちろん殺人鬼、もとい殺人犯役の方は殺人を行って構いません。でなければ実験と呼べませんから」

「おい、ちょっと待てよ。オレたちは殺されるってことか？」

「殺される前に、犯人を当てればいいのです。皆さんはあちらにある交番――に模した、私達機関の人間が待機する施設に来ていただき、犯人と思われる推理、もしくは証拠を提示して頂きます。それが十分だとこちらが判断した場合、その方の安全は実験終了まで保障されます」

「そんな実験、違法に決まってんだろ。こんなバカな話があるか」

「ここは特別地域です。日本の法律など、及びませんよ」

「日本の法律云々の前に。世界的にも殺人は容認されていません。世界のどこにしようとも法に触れるのではないですか？そもそも、

ここはどこなのですか？」

メガネをかけた男も、このテーマに異を唱える。

「ここはどこか、という質問にはお答え出来ません。法に触れる事についてはご安心ください。

てづから機関は、あらゆる国籍から逸脱し、あらゆる行為を黙認された組織です」

「だから安心して殺されてください、ってか？ふざけてんじゃねーよ。つーかこんな契約詐欺だろ」

「テーマ未定、白紙の契約を容認したのはわしらだ。これは同意の上での契約、ということじゃ」

年老いた男は、仲裁に入る。あくまで悪いのは自分達だ、と。

「てめえ……こいつらの仲間か？さてはオマエが殺人役だな！」

「若いのは考えも若いのお、歳相応か、少し冷静になれい」

「じじいが……ふん」

若い男は年老いた男を睨みつけ、不機嫌さを隠すことなく辺りに威圧をかける。

「それでは、説明を続けさせて頂きます」

機関の人間はもめてる様子を気にする事無く、事務的に説明を続ける。

「私達の交番に推理証拠を提示し、もし正解と受理されなかった場合は、報酬金を100万円減らさせて頂きます。適当な推理で当てられても困るので、その対応策だと思ってください。何か質問のある方は居ますか？」

機関の人間の言葉を聞き、今まで静かに聴いていた身長の高い女性が手をあげる。

スーツを着た女性で、言葉からも態度からも落ち着いて見える。

まるでこうなることを知っていたかのような冷静さであった。

「犯人役以外が殺人を行う場合はどうなるのでしょうか？また、犯人役以外が殺人を犯したとして、その人を犯人役と勘違いして交番に推理や証拠を提出した場合はどうなるのでしょうか？」

「犯人役以外が殺人を犯す事も、問題はありません。後者の質問ですが、それは間違いと受理させて頂きます。確固たる証拠があり、確実に殺人を行ったのに受理されない……その場合、犯人役は他にいるという事です。また、もし犯人役が殺害されてしまった場合は、それでも続行とさせて頂きます。なぜならみなさんは、七日間生き延びる事でも報酬を得られる契約ですから、ね。ああ、その場合、犯人役が死亡している事は告知しませんのでご了承を。テーマについてはご理解いただけたでしょうか？」

多くの人は混乱している様子だった。

突然の告知。人権もあったものじゃない実験。

晴彦自身も、いまいち信じられない。

本当にそんな実験をやらされるのか。

そんなテーマでの生活をやらなければいけないのか。

「ご理解頂けたようですね。次にこの敷地内での生活についてですが、あちらをご覧ください」

機関の人間は、言葉を発しない晴彦達に対する配慮は無く、説明を続けた。

今晴彦達がたっている位置からそう遠くない距離にあるプレハブ小屋を指差した。

「皆様にはあちらにあるプレハブ小屋に生活してもらいたく思います。それが嫌だという方はビジネスホテルと旅館も用意してありますので、そちらに泊まって頂く形でも構いません。コンビニ、スーパー、洋服店などの生活に必須な私設は一通りそろえてあります。更にカラオケやビリヤード、のように一定の娯楽私設はございます。それでも不便を感じた場合は、申し付けて頂ければ出来る限りに対応を致します。なお何か質問あればいつでも交番にて受け付けます。それと、皆さんコレをお持ちください」

グレーのスーツをきた機関の人間の言葉と同時に、黒服の男達が動く。

彼らは晴彦達一人ひとりに携帯と資料を手渡した。

「資料は、現時点のテーマと、それに伴ってのここでの生活ルールを記載しております。携帯電話はコチラでのみ使用できる携帯電話です。この端末内にも生活ルールが載っています。また、そちらの携帯電話には、＜手づから機関＞と表示されたアドレスが存在するはずですが、そちらは交番につながっておりますので、質問または犯人告白時などにご利用ください。なお、みなさんが所持している携帯電話はこのエリアでは使用不可能なので、そのまま所持してい

ただいて結構です。以上で説明を終わらせていただきます。最後に質問のある方はいますか？」

「……おれたちは、どうやって一週間すごせば良いんですか？」

晴彦は、ここでどうやって過ごせば良いのかがわからなくなっていた。

答えが返ってくるとは思えない、だが、ダメもとで尋ねてみた。

「こう過ごさなければいけない、というのはありません。こちらとしては殺人犯役の方を探して当てて欲しいところですが……どんな風になったとしても、それも一つの実験データになりますから。それでは皆さん、よい結果を期待しています」

グレーの服をきた機関の人間は、にやりと嫌な笑みを浮かべて去っていった。

七人

機関の人間はどこかへ立ち去る。

気づけば、いつの間にかバスもどこかへ行ってしまったようだ。

晴彦は取り残された6人を観察する。

晴彦を呼んだ若い青年。ややケンカっぱやい印象を受ける私服の男。常におろおろして、わかりやすく混乱している女性。

落ち着いた雰囲気であり、白紙の契約をした自分が悪いといった老人。

冷静で落ち着きあり、先ほども何度か質問をした、スーツを着た長身の女性。

先ほど一度だけ質問をした、眼鏡をかけた男性。

髪は茶髪で、耳にピアスをした、いかにもギャルな女の子。

そして俺——か。

この中に殺人鬼がいる。

まあ、自分ではない事は分かるので、この6人の誰かなのだろうが……一体だれなのだろうか。

いかに殺人鬼といえど、この場で暴れたら多勢に無勢で抑えられてしまうので、意味がないだろう。

そんな事をするとは思えない。

今のうちに少しでも、自分の身を守る為に観察をしておきたい。

すると、先ほどからよく質問をしていた長身の女性が皆に語りかける。

「なんだか大変な事になってしまったわね」

「全くじゃな。こんな丸投げな事になるとは思わなんだ」

「とりあえず、あそこのプレハブ小屋に行きましようか」

「オレは嫌だね。一人で別の場所に泊まる」

晴彦を呼んだ私服の男は、長身の女性の提案を蹴る。

「殺人鬼がいるメンバーと仲良くなんて出来るか」

「1人でいるほうが危ないわよ？」

「どうかな。オレは固まっている方が危ないと思う」

「じゃ、うちも1人でいるからー後はよろしくー」

ギャル風な女の子は1人でどこかへ歩いていく。

「ちょ、ちょっと！危ないって！」

常におろおろしていて言葉を発しなかった女性が、女の子の腕を掴む。

「なに？オバサン」

「オバ！？わ、わ、わ、私がおばさん！？」

「用がないなら離してくれない？」

「ええ、離す！離すわ！」

そういつて女性は手を離した。

何がしたかったんだよ。

ギャル風な女の子はテクテクと1人どこかへ歩いていく。

「それで、貴方はどうするの？ 青年くん」

「茂だ。宮原茂。それがオレの名前だ」

「そう。私は最上朱希。よろしくね」

「残念だが、よろしくはないな。オレも別に泊まらせてもらう。…都合の良い提案かもしれないが、情報交換はしたい。オレを含めたここにいる6人、皆で連絡先を交換しないか？」

若い男、改め茂は、支給された携帯を取り出す。

「良いアイデアだと思うわ、私は賛成。他の方はどうですか？」

皆反対意見もなく、先ほどのギャルを除いた、ここにいる6人全員で互いのアドレスを交換した。

「じゃ、オレはコレで。せいぜい殺人鬼さんを野放しにしないでくれよ」

茂は挑発的に吐き、交番へ向かう。

おそらく旅館やビジネスホテルはどこかを聞きに行ったのだろう。

乱暴な物言いの男だが、ギャルよりはよほど色々考えているようだ。

「さすが用意された所だけあって――安全性が高いわね」

朱希はプレハブ小屋に足を踏み入れるなり呟いた。

「そうなんですか？」

「ええ、この壁の薄さなら、ちょっとした物音でも聞こえるから乱暴な事は出来ないわ。それにこの部屋の広さ。7人くらいなら十分寝泊りできる広さの部屋と、3人部屋、4人部屋の3種類がある。集団で寝泊りする為の場所のようね」

「なるほど……」

晴彦はこの女性はこちらまで考えていたのか、と驚く。それと同時に、尊敬と畏怖を覚える。

晴彦達は一番広い部屋に行き、そこで色々と話し合うことになった。

「まず、お互い自己紹介しませんか？このままでは、お互いを呼び合うのも不便です。名前程度なら、知られたところで特に問題は無いでしょう。いかがでしょうか？」

「俺は賛成です」

「わしも賛成じゃ」

「問題ないと思います」

「わ、わかりました」

「それでは私から——といっても、さっき言ったと思うけど、私は最上朱葉。26歳、普通のOLです。

皆さんは、名前だけでもいいと思います。では次の方、君でいいかな？」

朱希は、晴彦を指差す。

「あ、はい。俺は佐藤晴彦って言います。歳は19歳。大学生です。ヨロシクお願いします」

突然自分が指されたことに多少の同様はしたものの、高校ではそんな事がしょっちゅうあったので、特に焦ることもなく自己紹介をする。

「佐藤君か、ヨロシクね。次の方、お願いします」

朱希は、晴彦の隣、歳を召した方に視線を送る。

「わしは、赤石亮。歳は63。外科医じゃ。といっても治療道具もなんも持ってきとらんから、ケガしても治療できん。あてにするなよ」

背は小さく腰は曲がり、この6人の中ではダントツの最高齢だと思われる。

年齢は言わなかったが、おそらく60台後半だろう。70台かもしれない。

だが彼の目は衰えておらず、今も現役だという事がよくわかる。

「赤石さんですね、よろしく願いします。それでは次の方どうぞ」

「僕の名は春原透。中学校の教師を勤めさせて頂いてます。27歳なので、最上さんより僕のほうが一つ上ですね。何かあれば頼ってください」

大人らしい落ち着いた眼鏡をかけた男。

男というより、男性という感じで、落ち着いた印象を受ける。

歳相応な見た目であり、まさに紳士である。

「そうですね、頼りにさせてもらおうと思います」

「ええ、是非に」

透は朱希に笑顔を向ける。

春原透は、男の晴彦からでもカッコイイと思えるほどのルックスであり、笑顔を向けられたら大半の女性は落ちてしまうのではないかなと思ってしまう。

「それでは次の方、最後ですね。お願いします」
そんな透をスルーして、自己紹介を続ける朱希。
良いざまだと思ってしまう自分が悲しい。

「——え？あ、はい。なんでしたっけ？」

「自己紹介です」

「あ、あっ、そうでしたねっ。すみませんっ」

女性はペコペコと頭を下げる。どうやら春原透に見とれていたようだ。

っ
て
お
い
。

「私は、木原優子って言います。歳は25歳です。よろしくお願
い
し
ま
す」

優子はぺこりと頭を下げる。

25歳といわれても信じられないほど幼く見える。

高校生といわれれば信じてしまうレベルである。

実際晴彦も、自分より年下だと思っていた。

「よろしくね、優子さん。——それではここにいる皆さんで今後の
方
針
に
つ
い
て、
話
し
合
い
た
い
と
思
い
ま
す」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3241u/>

セブンキラー

2011年10月8日13時45分発行